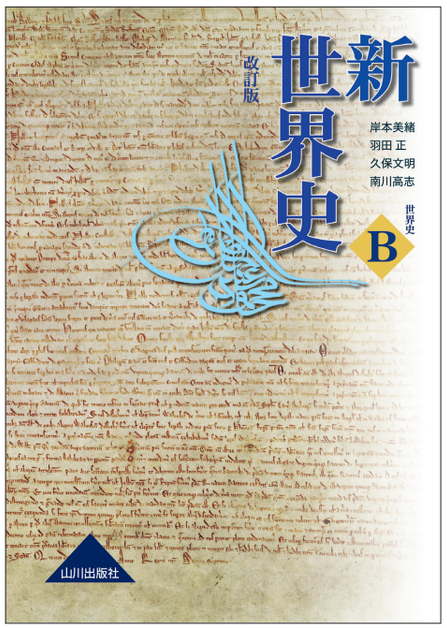
新世界史 改訂版

世B313

［著作者］
岸本美緒
羽田　正
久保文明
南川高志
小田中直樹
勝田俊輔
千葉敏之

［編集協力者］
鳥越泰彦



B5変型判・454頁　予価861円

新編集の斬新な教科書

新しいスタンダード

各分野で研究をリードし，また次代を担う執筆陣の総力を結集してつくられたグローバル化の時代にふさわしい「世界史」教科書。

1 教科書を読み，考えながら学ぶ

2 「考える歴史」と時代像の把握

Message

『新世界史』代表者メッセージ

岸本美緒（きしもと　みお）
お茶の水女子大学名誉教授

「何」のために世界史を学ぶのか」という問いにはさまざまな答があるでしょうが，正面から答えるならば，「私たちが生きているこの世界の成り立ちを理解し，広い視野から物事を判断できるようになるため」ということができるでしょう。本書は，次の時代を担うべき高校生の皆さんの世界史学習の意欲にまっすぐに応え，細かい知識よりも骨太な世界史の流れを，そして今日につながる諸問題の歴史的背景を理解していただくため，執筆陣が協力して作成した新しい世界史の教科書です。

本書の内容は，高校の世界史教科書としては，かなり詳しいほうだといえるでしょう。しかし本書の目的は，多数の人名や事項名を列挙して個々に暗記してもらうことではなく，さまざまな事象の意味やその間の脈絡をできるかぎりわかりやすく説明し，理解してもらうことにあります。むしろ，本書を使用する皆さんが，大事だと思う点を自らの頭で確認し，印をつけたり線をひいたりしながら使っていただければ幸いです。

全体の構成は時代順に５部に分かれ，それぞれ「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」と表題がついています。時代区分の方法について学界にはさまざまな考え方がありますが，ここでは大きな世界史的変動のあった時期を境に区切り，世界各地の動きの共時性を感じ取っていただくよう配慮しました。そして，各部に付した「テーマ」と「まとめ」において，世界全体を見渡した問題の提示と解説・設問をおこない，各部の重要問題を，諸地域相互の関連と比較のもとに整理して把握できるように工夫しました。

そのほか，本書の大きな特色は，世界史を学ぶうえでポイントとなる重要な事項や概念についてのより深い理解をめざし，「解説」を設けてかなり詳しい説明をおこなっている点です。現代の世界のあり方にも深くかかわる問題を含んだ事項も多数あります。少し難しいと思われる内容でも，地理や日本史，政治・経済などとも関連させつつ学習することによって，日常接するニュースの背景や，現在当然だと思われている事象の成り立ちが歴史的な奥行きをもって把握でき，立体的な世界像の形成に寄与しうるものと期待しています。

以上，「考える」「理解する」世界史教科書という点に重点をおいた本書の意図をご了解いただき，その特色を活用して授業・学習をおこなっていただくことを願っています。

改訂のポイント

用語を約100点追加

財産政治　ドーリア式・イオニア式・コリント式(図で)　カラカラ帝　ソグド人　柔然　アブー＝バクル　ウルグ＝ベク　「アダムが耕しイヴが紡いだとき、だれが貴族であったか」　価格革命　毛織物工業　ニューコメン　機械工業　コークス製鉄法　ダービー　運河　フルトン　交通革命　機械制工場　女性・子どもの労働　ニューイングランド植民地　メイフラワー号　ピューリタン入植者　トマス＝ペイン『コモン＝センス』　ヨークタウンの戦い　ミラボー　断頭台　最高価格令　徴兵制　バブーフ　イタリア遠征　エジプト遠征　ナポレオン1世　ナポレオン法典　ネルソン　トラファルガーの海戦　アウステルリッツの戦い　セントヘレナ島　スイスの永世中立　タレーラン　アレクサンドル1世　ドイツの学生組合(ブルシェンシャフト)　カニング　コブデン　ブライト　腐敗選挙区　無政府主義(アナーキズム)　フーリエ　第一インターナショナル　東インド会社の商業活動停止(1834年)　デパート　臨時政府(1871)　実証主義　エディソン　ピアリ　アムンゼン　ライト兄弟　ダイナマイト　ノーベル　写実主義　モネ　ルノワール　印象派　ロンドン会議(1830)　ナイティンゲール　デュナン　国際赤十字社　ローマ共和国　鉄血政策　西部の開拓　「涙の旅路」　中国系・日系移民　「人民の、人民による、人民のための政治」　フロンティア　フェビアン協会　労働組合　「ヴ＝ナロード(人民のなかへ)」　ストルイピン　ラスプーチン　パン＝ゲルマン主義　南アフリカ連邦　イタリア＝トルコ戦争　サイクス・ピコ協定　ウィルソンの十四カ条提案　宥和政策　バドリオ政府　トルーマン＝ドクトリン　日ソ国交回復　日本の国連加盟　非同盟諸国首脳会議　「ゆりかごから墓場まで」　人民公社解体　沖縄返還　高度経済成長　朴正熙　金大中　NIES　など

約200の用語をゴチック(太字)に変更

オリエント　カルタゴ　ペリクレス　カエサル　オクタウィアヌス　アクティウムの海戦　朝貢・冊封　司馬遷　冒頓単于　均田制　後ウマイヤ朝　バグダード　ハールーン＝アッラシード　サラディン　トゥール・ポワティエ間の戦い　コルテス　ピサロ　紅巾の乱　李成桂　フランシスコ＝ザビエル　マテオ＝リッチ　オランダ独立戦争　レパントの海戦　リシュリュー　第2次囲い込み　三角貿易　産業革命　ワット　ワシントン　ロベスピエール　マルクス　ナポレオン3世　農奴解放令　シモン＝ボリバル　プラッシーの戦い　チュラロンコン　林則徐　曾国藩　李鴻章　ディズレーリ　ヴィクトリア女王　ホセ＝リサール　ネルー　中国共産党　蔣介石　毛沢東など

目 次

年間指導計画例

4月10

世界史を学ぶ …… 1

世界史への扉 1 自然環境と人類の関わり　水・土地・都市 …… 8
世界史への扉 2 日本の歴史と世界の歴史のつながり　japan と japonisme …… 10
世界史への扉 3 日常生活にみる世界の歴史　砂糖・茶・コーヒー …… 12

序章 先史時代 …… 14

第Ⅰ部 古代

5月13

テーマ 古代文明と帝国の形成 …… 18

第1章 オリエントと古代ギリシア …… 22
1 古代オリエント …… 23
2 古代ギリシア …… 27
3 ヘレニズム時代 …… 35

第2章 古代ローマと西アジア …… 39
1 ローマの発展と帝国形成 …… 39
2 ローマ帝国の繁栄とキリスト教 …… 42
3 ローマ帝国の衰退 …… 48
4 西アジアの諸王朝 …… 52

第3章 南アジア・東南アジアとオセアニア …… 54
1 古代の南アジア …… 55
2 古代の東南アジア …… 59
3 古代のオセアニア …… 60

第4章 東アジア・内陸アジア …… 61
1 東アジア・内陸アジアの風土と人々 …… 61
2 中国の初期王朝 …… 64
3 秦漢帝国 …… 69
4 北方ユーラシアの動向 …… 74

第5章 アフリカと南北アメリカ …… 76
1 古代のアフリカ …… 76
2 古代の南北アメリカ …… 78

まとめ …… 80
主題学習 時間軸からみる諸地域世界 …… 82

解説 ペルシア戦争とアテネ／ヘレニズム／「ローマ人」／ローマ化／ローマ帝国社会の変容／仏教の展開／華夷思想／儒学と皇帝政治／司馬遷と『史記』／歴史と記録

本文・コラムのおもな修正箇所

p45 「繁栄するローマ帝国の社会」のあとに現行版p46，47にある「アルプスの北の世界」を移動。

p55 オセアニアの風土と人々の記述を変更。

p71 皇帝の権力と支配について，よりわかりやすい説明にした。また，「長安」の用語を漢の説明の冒頭へ移した。

p60 コラム「太平洋に広がった人々」を削除し，「3 古代のオセアニア」の文章を改変。

第Ⅱ部 中世

6月15

7月9

テーマ 宗教の広がりと人々の大規模な移動 …… 84

第6章 東アジア・内陸アジア諸地域の動向 …… 88
1 分裂と融合の時代 …… 88
2 隋唐帝国と東アジア …… 94
3 宋と周辺諸国 …… 99
4 モンゴル帝国 …… 106

第7章 西アジア諸地域の動向 …… 111
1 イスラーム教の誕生とカリフの政権 …… 111
2 政治と文化の多元化 …… 116

第8章 南アジア・東南アジア諸地域の動向 …… 122
1 南アジア社会の新展開 …… 122
2 東南アジア社会の形成 …… 125

第9章 ヨーロッパの形成 …… 128
1 古代から中世へ …… 128
2 カール大帝とヨーロッパ …… 133
3 教皇権の確立と十字軍 …… 142
4 ヨーロッパの膨張と成熟 …… 145
5 ヨーロッパの危機と再生 …… 155

まとめ …… 164
主題学習 空間軸からみる諸地域世界 …… 166

解説 東アジアの仏教／朝貢体制／長安の都／科挙／イスラーム教／スンナ派とシーア派／イスラーム教と男女平等／ヒンドゥー教／インド洋海域世界／ローマ教皇／荘園制と村落／移動宮廷／十字軍／俗語とラテン語／ユダヤ人／ルネサンス

p97 羈縻政策の説明をわかりやすく改訂。

p99 形勢戸について注を追加。
p104 市舶司について，説明追加。

p107 「チンギス＝ハンの即位」の図を「モンゴル帝室の系図」に変更。

p120 イクター制に注を付け，解説追加。

p123 南インドのバクティ運動については削除し，ガネーシャの写真追加。
p125 パガン朝，スコータイ朝の説明を時系列にそった記述に変更。

p144，145 「貴族」という用語に注をつけ説明。

第Ⅲ部 近世

9月14

テーマ 「世界の一体化」と新たな国家統合 …… 168

第10章 大交流・大交易の時代 …… 172
1 ユーラシア諸地域を結ぶネットワーク …… 172
2 東方航路の開拓と大西洋世界の出現 …… 176
3 世界の一体化の進展 …… 182

第11章 東アジア・東南アジア諸地域の動向 …… 185
1 明代の朝貢世界 …… 185
2 大交易の時代の東アジア・東南アジア …… 189
3 清朝支配の拡大 …… 195
4 清朝の隣接諸地域 …… 201

p175 ダウ船とともにジャンク船の写真を追加。

p201 「4 朝鮮と琉球・日本の動向」→「4 清朝の隣接諸地域」，「朝鮮」(小見出し)→「朝鮮王朝後期の動向」，「琉球・日本」(小見出し)→「江戸時代の日本と琉球」

世B313 新世界史 改訂版

p210「俸給は，ジャーヤギールと呼ばれる土地からの徴税権である」という一文削除。

第12章 西アジア・南アジア諸地域の動向 …… 203
1 オスマン朝 …… 203
2 サファヴィー朝とムガル朝 …… 207
第13章 ヨーロッパの成長 …… 212
1 近世の始まり …… 212
2 宗教改革 …… 216
3 主権国家体制の成立 …… 221
4 オランダの覇権から英・仏の抗争へ …… 242
5 北欧・東欧の動向 …… 233
6 理性と啓蒙の時代 …… 238
まとめ …… 242
主題学習 図像資料から読みとく世界の歴史 …… 244

10月 12.5

p213『君主論』の内容説明をわかりやすく変更。
p214 人文主義者の説明をわかりやすく変更。

p220 現行版にあるポーランド，スウェーデンに関する記述をp234の「5 北欧・東欧の動向」に移動。

p234「ロシアの台頭」の小見出し→「ポーランド・スウェーデン，そしてロシアの台頭」とし，p220の内容も含め，変更。

解説 ソグド人／生物交換と「伝統文化」／世界の一体化の構図／南宋と北京／琉球とマラッカ／北虜南倭／「多民族国家」清朝／ヨーロッパからみた中国／近世日本の対外関係／デヴシルメとイェニチェリ／イスファハーンは世界の半分／近世ヨーロッパ国家と王位継承／近世ヨーロッパと戦争／啓蒙の諸相

第Ⅳ部 近代

テーマ 「進歩」の観念と「近代」モデル …… 246
第14章 革命の時代のヨーロッパ・アメリカ …… 250
1 商業社会と産業革命 …… 250
2 アメリカ革命 …… 254
3 フランス革命とナポレオン …… 259
4 反動と改革 …… 267
第15章 ナショナリズムの時代のヨーロッパ …… 273
1 1848年の諸革命 …… 273
2 イギリスとフランスの繁栄 …… 276
3 クリミア戦争とヨーロッパの再編 …… 281
第16章 入植と移民による新国家の建設 …… 286
1 アメリカ合衆国の発展 …… 286
2 ラテンアメリカとカナダ・オーストラリア・ニュージーランド …… 291
第17章 アジア諸地域の動揺 …… 296
1 西アジアの動揺 …… 296
2 南アジア・東南アジアの動揺 …… 301
3 東アジアの動揺 …… 308
まとめ …… 316
主題学習 文字資料から読みとく世界の歴史 …… 318

11月 13.5
12月 7

p257 アメリカの「邦」と「州」の関係を注で説明

p279「19世紀の芸術家」の表を追加。

p285 コラム「男性と女性の地位」は削除。

p315 日朝修好条規から甲午農民戦争，日清戦争への流れを詳しく説明。

p296「大土地所有者であるアーヤーンと呼ばれる名士が，両国内各地で自立の傾向を示すようになった」という一文を削除。

解説 エネルギー革命／アメリカ合衆国と人種問題／アメリカ合衆国建国の特徴／複合革命／大西洋革命／国民国家とナショナリズム／経済学の時代／選挙制度／植民地主義／サン＝シモン主義／ロシア「大改革」／白人入植による新社会／アメリカ合衆国の特異性／移民の流れ／アフガーニーとパン＝イスラーム主義／インド社会とイギリスの支配／三角貿易の背景

※現代部分は世界の情勢を鑑み，全体に修正を加えている。

第Ⅴ部 現代

テーマ 今日の世界の現状と課題 …… 320
第18章 帝国主義と世界 …… 324
1 現代社会の特質 …… 324
2 帝国主義と列強 …… 325
3 アジアの民族運動 …… 332
第19章 二つの世界大戦 …… 344
1 第一次世界大戦とロシア革命 …… 344
2 ヴェルサイユ体制と欧米諸国 …… 350
3 アジアの動向 …… 356
4 世界恐慌とファシズム …… 366
5 第二次世界大戦 …… 375
第20章 冷戦と第三世界の独立 …… 381
1 東西対立の始まり …… 381
2 アジアにおける冷戦と中東での展開 …… 386
3 第三世界自立の模索と社会主義圏の動揺 …… 390
4 超大国の動揺と第三世界の動向 …… 395
5 新冷戦と冷戦の終結 …… 407
第21章 今日の世界 …… 411
1 超大国アメリカの外交 …… 411
2 EUの実験とロシアの動向 …… 414
3 中東・アフリカ・ラテンアメリカの動向 …… 417
4 アジアの発展と新たな課題 …… 420
5 現代文明とグローバル化 …… 424
まとめ …… 430
主題学習 資料を活用して探究する地球社会の課題 …… 432

1月 12
2月 12
3月 12

p328 コラム「イギリス優位へのドイツの挑戦」をp326本文に挿入。

p346 ヴァイマル共和国の記述は，p354へ移動。

p350 アメリカが債務国から債権国になったことを追加。現行版のp353コラム「国際平和の思想と国際連盟」をp350へ移動。できるだけヴェルサイユ体制へ近づけた。

p370 ワシントン体制以降の日本の状況を追加。
p371 第一次世界大戦後のチェコスロヴァキアの状況を追加。

p398 コラム「ベトナム戦争」→コラム「核軍拡と核拡散」

合計時数 130

詳しいシラバス案はホームページをご覧下さい。

解説 帝国主義の時代／アジアの民族運動と日本／第一次世界大戦の歴史的意味／国際平和の思想と国際連盟／ロシア革命とソ連の体制問題／パレスチナ問題の起源／第一次大戦後のアジアの民族運動／日本の植民地統治／ヒトラーとナチ党／歴史の教訓／日米開戦／大戦中の戦局と外交／冷戦／日本の敗北と占領／ハンガリーの悲劇／核軍拡と核拡散／「ニクソン＝ショック」とニクソン外交／クルド人の現代史／ソ連の社会主義と中国の社会主義／黒人大統領の登場／二つの和解の試み／イランをめぐる国際情勢／中国と南シナ海・東シナ海／人権と人権外交

索引 …… 436

表見返し 世界の自然・世界の気候区
裏見返し 現代の世界

世B313 新世界史 改訂版

本書の大きな特徴は「解説」にあります。「仏教の展開」「朝貢体制」「スンナ派とシーア派」「インド洋海域世界」「ユダヤ人」「国民国家とナショナリズム」「アジアの民族問題と日本」「人権と人権外交」など、たんなる歴史上のトピックではなく、歴史を現代世界にかかわる問題としてとらえ、歴史の理解に必要と思われるテーマを詳しく説明しています。

ランダが脱落し，英・仏の争いとなった。イングランド人は，北東部のニューイングランドや南東部に，フランス人はカナダやルイジアナに入植した。仏領植民地はヨーロッパ向けの毛皮を主要産業としたが，人口では英領植民地とくらべ圧倒的に劣勢であり，七年戦争で敗れて崩壊した。英領植民地をみると，のちの13植民地のほとんどは17世紀に発足していた。ニューイングランドでは17世紀の「巡礼の父祖」(ピルグリム＝ファーザーズ)に始まるピューリタンの伝統が強かったが，18世紀にはさまざまな移民が加わって人口が急増し，林業・漁業に加えて海運業が発達した。南東部ではタバコや米，のちに綿花が黒人奴隷をもちいたプランテーションで栽培され，ヨーロッパおよびアメリカの他の植民地に輸出された。また，英領植民地は重商主義体制のもとで本国イギリスの工業製品の輸出市場ともなった。こうしてイギリスの北アメリカ植民地は，七年戦争後には本国の約3分の1の経済規模をもつまでに成長していた。

→p. 229
→p. 236
→p. 255

このようにして，近世に大西洋を挟んでヨーロッパ・南北アメリカ・アフリカのあいだに人とモノの貿易連鎖が成立し，大西洋世界に資本主義のシステムができあがった。

世界の一体化の構図

アジアとヨーロッパの関係をみると，16世紀からヨーロッパ人はアジアの物産を求めて海を渡り，アジア内の貿易に参入した。アジアから香辛料や宝石，17世紀からは絹・陶磁器・茶，そしてインドの綿布(更紗)などが輸入され，ヨーロッパの貴族やブルジョワの生活はいろどり豊かなものにかわった。こうした異国の物産(アメリカ大陸産のものも含む)への欲求は庶民のあいだにも広まり，ヨーロッパは高い消費需要をもつ社会へとかわりつつあった。しかし，ヨーロッパの対アジア貿易はつねに赤字であり，その支払いにはアメリカ銀があてられたため，アジアには銀が集中した。また，ヨーロッパ人のアジアへの進出は，東南アジアや台湾でのスペインとオランダの例を除けば，基本的には貿易拠点の確保にすぎず，アメリカ大陸のような広大な領域の植民地支配はなされなかった。結局のところ，近世のヨーロッパ人による世界の一体化は，アメリカ大陸の従属，アジアのさらなる繁栄をもたらしたのであり，当時の世界経済は，アジア・ヨーロッパ・南北アメリカにかけて，強から弱への地図を描いていた。

この構図に変化がみえはじめるのが18世紀後半であり，この時期に北アメリカにアメリカ合衆国が成立して急速な経済成長を始めた。またイギリスがインドで領域支配を始め，その後も支配地を拡大していったことで，アジアとヨーロッパの力関係の逆転が始まり，19世紀にアジアと世界を支配する西欧資本主義の前提がととのうことになるのである。

教科書を読み，考え，学ぶ

第11章

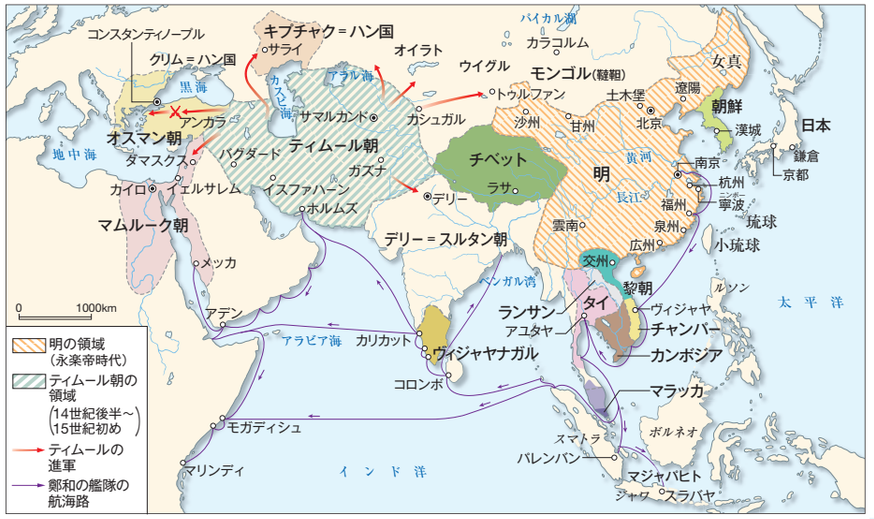
東アジア・東南アジア諸地域の動向

叙述を重視しました。
たんに固有名詞を連ねて出来事を羅列するのではなく，出来事の歴史的背景との連関が理解できるように意識して叙述されています。新しいスタンダードをめざし，歴史学の議論に踏み込んだ記述もなされていますが，丁寧に叙述してありますので，高校生でも十分に理解できます。

1　明代の朝貢世界

14世紀の東アジア

14世紀にはいると北半球全体で異常気象が続き，ヨーロッパでの凶作や疫病とほぼ時を同じくして，東アジアでも自然災害による飢饉がおこり，元朝の中国支配はゆらぎはじめた。中国では，白蓮教徒❶による紅巾の乱をきっかけに，各地で反乱がおこった。貧しい農民出身の朱元璋(1328～98)は，反乱のなかで頭角をあらわし，儒学の素養をもつ知識人の協力を得ながら，他の反乱軍指導者を倒して，経済の発達した長江下流域に支配を広げた。彼は1368年，南京で皇帝の座につき，国号を明(1368～1644)とした(洪武帝，在位1368～98，廟号は太祖❷)。明軍に追われた元の帝室はモンゴル高原に



明代のアジア(15世紀頃)

❶白蓮教は仏教的要素の強い民間の宗教結社で，宋代に始まった。元末には，弥勒仏が救世主としてこの世にあらわれるという予言と結びつき，反乱を支える信仰となった。

❷「洪武」とは，朱元璋の制定した年号。明代以後，一世一元(一人の皇帝に一つの年号)の制が定着したため，皇帝は年号で呼ばれることが多い。廟号は，死後におくられる称号である。

世B313 新世界史 改訂版

第Ⅳ部

近代

テーマ 「進歩」の観念と「近代」モデル

各部冒頭の「テーマ」ではそれぞれの時代の特徴と見方を示してあります。

- ● イギリス産業革命始まる
- 1772 ポーランド分割（～95）
- 1773 プガチョフの反乱（～75）
- 1775 アメリカ独立戦争（～83）
- 1776 アメリカ独立宣言
- 1782 タイ，ラタナコーシン朝
- 1789 フランス革命（～99）
- 1792 フランス第一共和政
- 1796 イラン，カージャール朝（～1925）
- 1802 ベトナム，阮朝（～1945）
- 1804 ハイチ独立。以後ラテンアメリカ諸国の独立続く
- 1806 神聖ローマ帝国解体
- 1807 プロイセン農奴解放
- 1814 ウィーン会議（～15）
- 1821 メキシコ独立
- 1823 モンロー宣言

「進歩」の時代

第Ⅳ部で扱うのは，18世紀後半から19世紀にかけての時期である。この時期は通常「近代」と呼ばれているが，それでは近代とはいかなる時代だったのだろうか。

20世紀の喜劇王と呼ばれたチャップリンの代表作に「モダン＝タイムス」という映画（1936年）がある。彼は，そのなかで，工場の流れ作業や，ストライキをはじめとする労働運動や，あるいは景気の変動に翻弄（ほんろう）されるという，私たちと同じような庶民（しょみん）の日常生活を，哀（かな）しくもコミカルに描き出した。

映画のタイトル「モダン＝タイムス」は，日本語に訳すと「近代」となる。この近代とは，たんに，私たちが暮らしている「現在に近い時代」ではなく，人間の歴史における他の時代にはない特徴をもつ，まとまった一つの時代とみなすことができる。

この「近代」を特徴づけるキーワードは何か，といえば，それは「進歩」である。「進歩」とは近世にうみだされた概念（がいねん）であるが，近代という時代になってプラスの価値を与えられ，政治や法，経済，社会，あるいは文化の次元で，具体的な政策・制度・思想として現実化され，チャップリンが描写したような社会をもたらした。今日の社会の基本的な枠組（わくぐ）みは，近代に形づくられたといってよい。近代とは，人々が政治・経済・社会・文化などの諸側面において「進歩」を追求した時代だったのである。この意味における近代は欧米にうまれ，国際貿易や植民地化によって加速化する世界の一体化のなかで，アジアやアフリカなど欧米以外の地域にも広まった。

すなわち近世のヨーロッパでは，科学革命が新しい科学技術をもたらして人々の日常生活をかえ，また，望ましい政治・経済・国家・社会をめぐる諸思想が提示され議論された。そのなかで，時代はより良い方向にすすんでいるという思想，すなわち進歩の概念が，人々のあいだにうまれ，広まった。近代にはいると，この概念は基本的人権，民主主義，あるいは能力や富の量によって階層化された社会をめざす自由主義といった具体的な思想として肉づけされ，より良い未来に対する人々の期待と行動を支えることになった。

技術革新・国民国家・自由主義

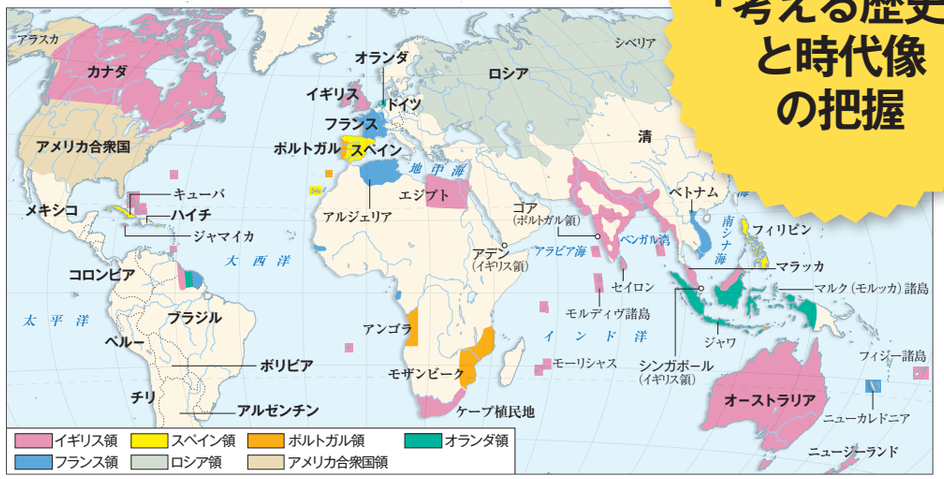
それでは「進歩」をもたらす原動力はどこに求められたか，といえば，それは諸産業における技術革新による生産性の向上，すなわち，より多くの財をより安価（あんか）に生産するシステムの構築（こうちく）であった。この事態は，イギリスで始まった産業革命によって，現実のものとなった。産業革命は，人々の全般的な生活水準を向上させることによって「進歩」に対する信頼を強めるとともに，産業革命を完了した国と完了していない国のあいだの政治的・経済的な格差を拡大した。

イギリス以外の諸国は，一刻も早く産業革命を開始し，推進し，完了させなければならないと考え，さまざまな政策をもちいて自国産業の技術革新を促進した。そうしなければ，産業革命を完了した先進国に政治的あるいは経済的に支配される危険があったからである。そして，この課題を実現するには，強い国家，すなわちナショナリズムを共有する国民からなる国民国

「考える歴史」と時代像の把握

全体を「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」の５部構成とし，各時代のイメージを明確に示すとともに，各地域でおきた事象の連関を把握できるようになっています。

「考える歴史」と時代像の把握



1880年代の世界

第Ⅳ部では，18世紀末の欧米で生じた諸革命と，世界各地における対応のあり方について学んだ。上の地図は，「近代」の終わり頃，1880年代の世界をあらわしたものである。この地図を第Ⅲ部まとめの「18世紀半ばの世界」の地図(243頁)と比較しながら，この１世紀あまりのあいだにおこった変化を振り返ってみよう。

近代の特徴

二つの地図をみくらべて目につくのは，アジアやアフリカ，とりわけアジアで欧米諸国の植民地が拡大したことと，南北アメリカ各地に広がっていた植民地が独立国家になったことである。ここから，近代がもつ二つの特徴がみてとれる。

第１に，近代とは，「後進地域」だったヨーロッパ・北アメリカが，それまで「先進地域」だったアジアに追いつき，追いこし，さらには，世界の他の地域を利用して，みずからの有利な立場を固定し強化しようとする時代であった。そのきっかけは，イギリスで始まった産業革命による技術革新と，その結果としての生産性の向上であった。欧米諸国は，先進地域という地位を安定させるために「欧米は商工業，それ以外の地域は農業」という国際分業をめざす自由貿易政策を推進し，また自国産業の原材料供給地兼製品市場となる植民地の獲得に乗り出した。これにより，清(シン)朝・ムガル朝・オスマン朝といった近世を代表する諸帝国は，政治的・経済的な衰退をよぎなくされた。

第２に，近代とは，社会や国家の構造を国内産業の生産性向上に適したものとし，身分制社会を自由主義社会，すなわち能力や富の量によって階層化された社会につくりかえるために，ナショナリズムに基づく国民国家の形成が推進された時代であった。北アメリカのイギリス領植民地は独立し，自由主義の旗手(きしゅ)を自任(じにん)するアメリカ合衆国となった。南アメリカのポルトガル・スペイン領植民地が独立できたのは，いち早く自由主義社会と国民国家の形成に成功したイギリス・フランスの圧力によって本国が弱体化したからであった。

● 近代の世界貿易や政治的支配関係の構造について，図や表をつくってまとめてみよう。

近代のインパクト

欧米諸国の貿易・外交政策は，欧米以外の地域では，さまざまな反響を引きおこした。それはしばしば，欧米を模倣(もほう)して技術革新や国民国家建設をすすめなければならないと主張する開化派と，各地域・国家に固有の生産システムや政治体制を活用して欧米諸国に対抗しようとする保守派の対立という形をとった。両者は，植民地化に対する危機感を共有してはいたが，しかし，路線対立による政策の迷走と試行錯誤(しこうさくご)による時間の浪費をもたらすことが多かった。

欧米諸国の圧力に直面しなければならないという点では，日本も例外ではなかった。アメリカ太平洋艦隊(黒船(くろふね))の来航(1853年)によって欧米諸国の圧倒的な力を目(ま)の当たりにした幕末(ばくまつ)の日本では，植民地化の危機にどのように対応するかをめぐり，攘夷(じょうい)派と開国派が激しく対立した。この対立は，幕府(ばくふ)派と反幕府派の対立とからみあい，新政府の樹立に向かった(明治維新(めいじいしん))。新しい明治政府は，欧米諸国を模倣することによって植民地化をさける路線を採用した。日本はこの課題を克服して植民地化の回避に成功し，さらに今度は欧米諸国と肩をならべて植民地獲得をめざす側にまわった。ときは帝国主義の時代にはいっていたのである。

● 開国から明治維新にいたる時代の日本人がみた東アジア地域の政治的・経済的な情勢をまとめてみよう。彼らにとって「富国強兵(ふこくきょうへい)」がどのような意味をもっていたのか，考えてみよう。

部の末尾には「まとめ」と「主題学習」をおき、各々に問いを設けて、生徒が自ら「考える世界史」を実践できるように工夫してあります。これらの問いには『新世界史教授資料』で執筆者自身が解答を用意しました。先生方・生徒さんと執筆者がともに世界史を考えようとのメッセージです。

新世界史 改訂版 教授資料　授業実践編

B5判・454頁　本体4000円

『新世界史 改訂版』の基本的視点と記述の趣旨をご理解いただくために，各部の「テーマ」と「まとめ」「主題学習」，ならびに各章・節の解説をご用意いたしました。いわば著者からのメッセージです。

第Ⅳ部 近代

テーマ：「進歩」の観念と「近代」モデル

◉時代区分

第Ⅳ部「近代」は，産業革命が始まる18世紀半ばから，[redacted]まる19世紀第４四半期までを対象と[redacted]の時代の特徴を「技術革新・自由主[redacted]進歩が追求されたこと」において[redacted]として，「近世」と「近代」を[redacted]ことがある。すなわち，かつ[redacted]配的な時代区分が「古代・中[redacted]区分論だったのに対して，本[redacted]近代・現代」という５区分論[redacted]った時代においては，近代の始点[redacted]「大航海時代」におくべきか，それと[redacted]すなわち「二重革命（産業革命と市民革命）」におくべきか，という点をめぐって対立・論争・混乱があった。

日本についていえば，第二次世界大戦後しばらくの間外国史研究をリードした社会経済史研究は，生産システムを中心とする社会構造のあり方によって時代を区分する傾向にあり，近代とは「産業革命によって生み出され，市民革命によって確立した資本主義的な社会構造が支配的な時代」であると考えた。

これに対して，世界システム論のインパクトを受けて形成された新たな研究潮流は，大航海時代を経て欧米諸国を担い手とする世界の一体化が始まったことを重視し，近代とは「様々な社会構造を持つ諸地域が貿易によって単一の市場をなし，世界規模で分業する経済システムが機能する時代」であると考え，前者を批判した。

同様の対立は，日本の外国史学界に限られたものではなく，各地で見られた。この対立の結果として，現在の歴史学界の総体においては，「近代」を16世紀に始まる「前期近代」と18世紀に始まる「後期近代」に区分するという見解が有力になりつつある。本教科書の「近世」はここでいう「前期近代」に，「近代」は「後期近代」に，各々相当する（詳しくは，本書第Ⅲ部近世の「テーマ」を参照）。

いうまでもなく，ここでいう「近世」や「近代」という用語は（その時代に用いられた）実体概念ではなく（その時代を理解するために，のちに用いられる）整序概念を指している。したがって，「正しい」時代区分といったものは存在しない。ある時代区分が用いられるのは，それを用いれば歴史の理解が容易かつ適切になるという，ある意味では主観的な判断に基づいている。

それゆえ，この判断は，国により，時代により，あるいは歴史学者各々によって異なり得る。例えばフランスでは，ブルボン朝が成立した16世紀末からフランス革命までが「近代」であり，それ以降は「現代」と呼ばれるのが普通である。

本教科書についていえば，「近世」という時代を設定したことの背景には，「大航海時代」と「二重革命」は，ともに世界の歴史に大きなインパクトを与えた，あるいは，16世紀から18世紀半ばにかけての時代と，18世紀半ばから19世紀第４四半期にかけての時代は，各々異なる特徴を持ち，ひとまとまりをなす時代としてとらえられる，という認識がある。

◉近代の特徴

本教科書では，近代の始点は産業革命，とりわけイギリス産業革命におかれている。

周知の通りイギリス産業革命は綿工業に始まるが，まず重視されるべきは，産業革命以前の綿工業における「先進国」はインドであり，産業革命は「後進国」イギリスが「先進国」インドにキャッチアップしようとするなかで生じた，ということである。イギリス綿工業が遅れていたからこそ，一部の人々は，そこにビジネスチャンス，すなわち技術革新に乗り出す誘因（インセンティヴ）を見出したのである。

産業革命以前の世界経済のあり方は「遅れた欧米，進んだアジア」とでも呼ばれるべきものであった。産業革命を経て，両者の優劣は逆転する。この点からすると，近代とは，世界経済において「進んだ欧米，遅れたアジア」という構造が定着する時代であるといえるだろう。

本教科書では，この近代という時代を特徴づけるキーワードとして「技術革新」（上述）「自由主義」「国民国家」そして「進歩」の４つを採用している。

このうち自由主義は，政治的な自由主義や経済的な自由主義など，多義的で，また場合によっては相互に矛盾対立する複数の含意を持っている。すなわち，政治的自由主義は，思想・言論の自由を主張し，具体的・制度的には選挙権など政治参加の手段を平等に提供することを求める所説である。これに対して経済的自由主義は，経済活動に対する公的介入を否定する「自由放任」を唱道し，具体的・制度的には保護関税・輸出補助金・価格統制・各種産業政策の廃止を求める所説である。両者は「自由」という抽象的な概念を共有する以外の接点を持

教科書の随所におかれた「解説」（コラム）について，補足となる説明を加えました。

皇帝，「帝国主義」政策とは無関係に存在
国民の求心力働かず…国民国家に遅れをとる

解説 **国民国家とナショナリズム**

「想像の共同体」としての国民国家：私たちにとって「国民は国家の構成要素である」とか「国民とは，ある国家の国籍を持つ人々である」とかいった言説は，あまりに当たり前に聞こえる。それは，私たちが国民からなる国家，すなわち「国民国家（nation state）」に生活しているからである。しかし，「国民」という集団を１つにまとめているものは何なのだろうか。この問題は（国民国家が当然のものとして現存する現在はいざ知らず）国民国家が存在しなかったり政治的課題だったり建設途上だったりした時代にあっては，極めて実践的な意味を持った。それにどう答えるかによって「国家」の境界が決定されるからである。

国民は，民族や人種や宗教といった「実在する属性を共有する集団」と定義されることが多い。国民を１つにまとめているのはこの「属性」だというわけである。しかし，政治学者アンダーソンによれば，この定義は正確ではなく，国民が共有する属性は「共有する」と想像されているにすぎない。共有されている「属性」があって，それに基づく「国民」が生まれるのではなく，はじめに「国民」があって，後知恵として何らかの「属性」が共有されているという事態が「発見」されるのである。アンダーソンは，このように考えたうえで，国民を「想像の共同体（imagined community）」と表現した。「想像の共同体」として国民を考える立場は，その後広く共有されることになる。

新しい「帝国」論の登場：想像の産物とはいえ属性を共有する国民から構成されるという点で，国民国家は構成員の均質性に秀でており，それゆえ産業革命や植民地獲得競争などに際して圧倒的なパワーを発揮できた。しかしながら，国民国家には，共有されている（と想像されている）属性を受容することを構成員に強いたり，属性の存否によって「国民」と「非国民」あるいは「国内」と「国外」を峻別したりする傾向があった。この点を批判的に評価する所説を「国民国家論」と呼ぶ。西川長夫に代表されるこの所説は，20世紀末になって広く受容され，国民国家に対する評価を大きく変えることになる。

国民国家とは対照的に，構成員の多様性を認めたり，国境の曖昧さを容認したりするような国家も存在する。その例としてはハプスブルク朝オーストリアがあげられるが，このような特徴を持つ国家は，同じく20世紀末になると（分析概念として）「帝国」と呼ばれ，国民国家とは逆に，肯定的に評価されていく。

83　革命の諸思想 (P.270～272)

【授業のポイント】

1．ウィーン体制下での「正統主義」と「自由主義」の具体的なせめぎ合いを，イギリスにおける諸改革の実現を取り上げて理解させ，イギリスが「世界の工場」となった要因に気付かせる。

2．自由主義的改革によって発生した社会問題に対し，民衆や労働者と政府がどのように対応したのかをまとめさせ，それぞれの対応の違いを理解させる。

3．フランスやドイツでは社会問題解決のため「社会主義」の考えが登場し，社会思想家によっていろいろな解決策が提示されていたことを理解させる。

4．自由主義的社会の分析と社会問題解決のために経済学が発達し，その学説は各国の経済政策に大[redacted]ていたことを理解させる。

【教科書の整理】

1　改革の諸思想

(1) 自由主義の可否をめぐる対立

ブルジョワジー＝能力や富の量によって階層化された社会の確立・強化
イギリスで自由主義的改革を要求 → 改革の実現
政治的改革…審査法廃止・カトリック教徒解放法・第１回選挙法改正（腐敗選挙区の廃[redacted]
経済的改革…反穀物法同盟の結成（コブデン・ブライトら） → 穀物法の廃止
フランスでも参政権拡大
民衆・労働者＝生活水準の低下，新しい生活様式を強制（産業革命の進行）
「社会問題」の解決求める
↓

実際の授業を想定し，140時間の設定で各単元に即した「授業のポイント」ならびに「教科書の整理」もご用意いたしております。

新世界史 改訂版 ノート 世B313準拠

B5判・上146頁・下134頁　本体各700円(税別)　2色刷

・教科書『新世界史 改訂版』の準拠ノートとして，歴史的思考力を培うための素材を盛り込んだ，発展的な学習ノートです。
・左ページは，教科書の内容を概念図や流れ図に再構築して理解度を確認する空欄補充形式の整理問題です。
・右ページは，大学入試問題や史資料問題など論述中心の発展的な設問で構成しています。

教科書の内容を，概念図や流れ図を用いて視覚的に理解できるよう整理しています。

教科書の節や小見出しごとに項目を分け，各項目の要点をおさえられる構成にしました。

3 東アジアの動揺①

清の動揺とヨーロッパの進出

1 ヨーロッパの進出とアヘン戦争 教p.308～309

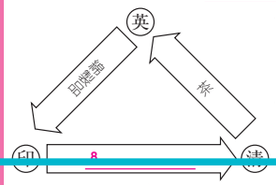
イギリスの進出

①産業革命の進行→ 1 ＿＿＿＿ の需要が高まる(当時は 2 ＿＿＿＿＿＿ が貿易独占)

イギリス ― 東インド会社 ― アジア貿易独占 ― 1 ＿＿＿＿・絹・陶磁器 ― 外国貿易独占 ― 公行 ― 清

対価となる製品がないため，3 ＿＿＿＿ で支払い
↓
銀の流出を止めたい

②公行体制の変更(英側 4 ＿＿＿＿＿＿)→清の却下→英は 5 ＿＿＿＿ 貿易へ



・清から銀が流出
→銀が高騰(＝実質 6 ＿＿＿＿ 税)
↓
・清，厳禁論を採用
― 欽差大臣 7 ＿＿＿＿，広州へ
― イギリス本国の反発

8 ＿＿＿＿ 戦争
1840～42

空欄補充形式で，重要用語がわかるようにしました。

2 欧米諸国との条約締結 教p.310～311

清の敗戦と欧米との条約

① 南京条約 1842 ：9 ＿＿＿＿ 廃止・10 ＿＿＿＿ 以南の五港(11 ＿＿＿＿ ・寧波・福州・厦門・広州)開港・12 ＿＿＿＿ 割譲

虎門寨追加条約(1843)：13 ＿＿＿＿ 待遇・関税自主権喪失
さらに14 ＿＿＿＿ 権(五港〈五口〉通商章程)

1844年，15 ＿＿＿＿ **条約**(米)・16 ＿＿＿＿ **条約**(仏)：同様の内容で締結
＊対中輸出伸びず。一方清は冊封体制という意識継続

17 ＿＿＿＿ 戦争 1856～60　英：アロー号事件(18 ＿＿＿＿)・19 ＿＿＿＿ ：宣教師殺害

② 天津条約 1858 → 20 ＿＿＿＿ **条約** 1860 ：キリスト教布教の自由・天津など11港の開港
21 ＿＿＿＿ の北京駐在→清，総理各国事務衙門設置
22 ＿＿＿＿ 南部割譲

③ 23 ＿＿＿＿ 事件 1871～81 ：ムスリムの反乱→イリ地方にロシアが出兵

イリ条約 ：ロシア側に24 ＿＿＿＿ な国境・通商権

＊19世紀後半，ロシアは25 ＿＿＿＿ 人の国を併合し，露領トルキスタンを形成

縦の流れを簡潔に示す帯を設けました。

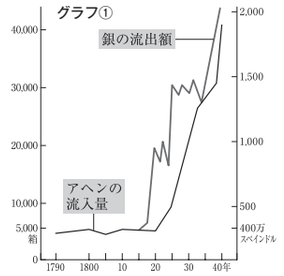
Challenge

A 1790年代から1860年代までの時期に中国が直面した国内の混乱や対外的危機について，以下の語句をもちいて400字以内で説明しなさい。　(成城大)
アロー戦争　　湘軍　　南京条約　　白蓮教徒の乱　　林則徐

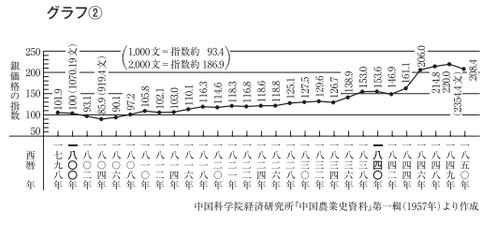
Hints
・イギリス系商人がアヘンを密輸して，中国から銀が流出→実質的な重税。
・太平天国の乱に際し，漢人の組織する郷勇が活躍。

B 以下のグラフ①・②，および教科書 p.199 を参考にして，中国にアヘンが大量に流入するようになった結果，どのような事態が発生したかについて180字以内で説明しなさい。

グラフ①



グラフ②



Hints
・アヘン輸入を中国は禁止していたため，1858年の合法化以前はすべて密輸。東インド会社は，表面に出ずに，カントリートレーダーと呼ばれる民間貿易商人が，アヘン密輸を行なう。
・1833年，東インド会社の中国貿易独占権廃止後，アヘンの密輸量が激増すると，対価としての銀が大量に中国から流出。
・グラフ②から，1849年には1798年と比べて銀の価格が2倍以上になっていることを読み取る。それはどういった影響を農民に与えたのだろう。

Challengeの欄では，入試問題や図版問題，史料問題など，ハイレベルな問題を設けました。

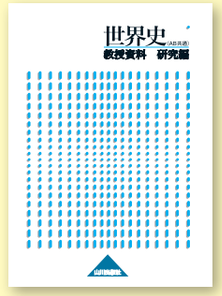
論述の解答に便利な目盛り付きのノート欄です。

ノートをご採用いただきますと，解答入りのPDFデータをサービスでお付けいたします。 CD

世界史教授資料　研究編（世界史教科書共通）

B5判・498頁　本体6000円(税別)

山川出版社のすべての世界史教科書に共通してご使用いただけます。大きいテーマを扱う「基本考察」，各用語ごとの「用語解説」，その他「エピソード」「参考文献」を『詳説世界史』の配列にしたがって古代から現代まで網羅した，世界史の先生方に必携の一冊です。



3 中国の古典文明

基本考察 東アジアの風土と人々

東アジアは地球上最大の陸塊であるユーラシア大陸と最大の海洋である太平洋が接する所である。ただし，北アジア・東南アジア・中央アジアと重なり合う部分を持ち，地域的に限定することは容易ではない。そもそも地域は問題関心によって設定される一面を持つものであり，教科書に記す地域は，あくまで一つの歴史的なとらえ方であるにすぎない。つまり，「東アジア」という言葉そのものに明確な定義はないのであり，中国語にも東アジアに似た「東亜」という言葉はあるものの，その定義もまちまちである。にもかかわらず，日本の歴史学の世界でしばしば中国・朝鮮・日本・ベトナム北部を指して東アジアというのは，この地域が気候や風土に共通性を持つほか，文化的な共通点を多く有すると考えるからである。

中国の国土は広大であり，その風土も多様である。その地勢は，大局的に見れば西高東低をなしており，西南のチベット高原を最高部となし，その北と東に広がるタリム・ジュンガル・四川の諸盆地，モンゴル・黄土・雲貴の諸高原が第２段目を構成する。そしてその東方に広がる平野と丘陵からなる地域が第３段目をなす。今日の中国でしばしば経済格差の問題として，沿海部と内陸部が対比されるが，今日の中国の経済と文化をリードする沿海部とは，広くはこの東部の平野と丘陵からなる地域を指している。

中国では西高東低の地勢により，多くの河川は西から東へと流れて海に注ぐ。そして，これらの河川を境として，中国東部はさらにいくつかの地域に分けられる。北からいうと，渤海に注ぐ遼河を境とする遼東と遼西地域，黄河を境とする河北と河南地域，長江を境とする江北と江南地域，東南丘陵部を流れ台湾海峡に注ぐ閩江を境とすると閩北と閩南地域，珠江河口の広州を境とする広東と広西地域などである。

北は雨量が少なく乾燥しがちで寒気が厳しいのに対し，南は雨量も多く温暖湿潤である。「南船北馬」という表現もあるように，主として北では陸運，南では水運が用いられた。これは中国内地における北と南の自然条件の違いを反映している。秦嶺山脈と淮河を結ぶ線は，ほぼ1000mmの等雨量線と一致し，かつては小麦と水稲の作付けの境界線とされてきた。北ではアワ・コーリャン・麦・豆を中心とする黄土での畑作が主であり，牧畜も盛んである。一方南では水田耕作が主流であり，二期作が可能な地域もある。

中国の遼西地域の西には長白山(白頭山)脈が連なり，白頭山脈から黄海に鴨緑江が注ぐ。この白頭山と鴨緑江に隔てられて朝鮮半島がある。朝鮮は咸鏡山脈を頂点に北西へ緩斜面が広がる北部と，太白山脈を頂点に西側に広い緩斜面を形成する南部に大別される。気候は温帯に属するが，６～９月に全体の３分の２以上の降水がかたよっており，とくに冬の乾燥は厳しい。この気象条件の克服が長い間農業の課題であったが，朝鮮王朝時代には二毛作や米の連作が可能となるに至った。

朝鮮史を考える際よく強調されるのは，常に中国および北アジアの諸民族の圧力にさらされてきたことである。しかし，朝鮮の歴史や文化はそれらの影響によって他律的に形作られてきたのでは決してなく，むしろ東アジアの情勢に応じて，中国などの先進的な文化を取り入れつつそれに独自の内容を盛り込むことによって発展してきた。高麗で布かれていた郡県制が郡と県の関係や県の支配のあり方などの点で中国と全く異なっており，当時の社会状況を踏まえた独特なものであったことなどがその好例であろう。

また朝鮮と中国東北部が歴史的に密接な関係にあることも重要である。現在，朝鮮人は朝鮮半島だけでなく，白頭山北側の中国東北部にも多数居住している。朝鮮からは間島と呼ばれるこの地域に現在居住している朝鮮人は，日本による韓国併合以後に移り住んだ人々の子孫がほとんどであるが，朝鮮王朝時代にも移住は行われており，さらに遡れば朝鮮三国の一つに数えられる高句麗やその後裔たる渤海はここから現在の沿海州にかけての地域を支配していた。歴史的な意味での朝鮮は，現在の南北朝鮮の領域だけでなく中国東北部をも視野に入れて考える必要があろう。

一方，中国南部の広西地域は，雲貴高原を挟んでベトナム北部に連なる。気候的にはモンスーンの影響を受け，乾期と雨期に分かれる。雲貴高原からトンキン湾に注ぐホン河(紅河)の河口の平野部には早くから農耕文化や青銅器文化が発達した。紀元前４世紀頃に始まるドンソン文化は雲南やタイ東北部との交渉を通じて多くの文化的要素を取り入れた文化であった。ドンソン文化の銅鼓は，中国南部から東南アジア各地に広がっており，その影響が広くおよんだことを示している。

ベトナム北部の中心地であるハノイには，７世紀には唐の安南都護府がおかれ中国の直接統治を受けた。このため，かつては中国の長期支配から脱した10世紀以降の諸王朝も中国を模した王朝であったとする見方が強かった。しかし，今日では北部ベトナムの中国化は陳朝以後徐々に主体的に進んだと考えられるようになっている。

もともと北部ベトナムは中国と南方を結ぶ交易拠点であったが，15世紀以降大規模灌漑農業による農業発展をテコに海上交易の中心地の地位を得ていった。17世紀には中国沿海部都市の繁栄を受けて交易の時代を迎え，日本人町もあらわれるなど，東アジアの海上交易とも結びついていた。

中国と朝鮮の沿海には大小合わせて約8300余の島々があるといわれる。日本列島は，これらユーラシア大陸と太平洋の間に広がる島嶼部の東に位置する。日本は古くからこれらの島々を介して大陸と人やものの交流を行ってきた。例えば中世には，北海道・サハリンを経てユーラシア北部へ，また対馬・壱岐などを経て朝鮮・中国へ至る交通ルートができあがっており，日本列島各地の社会に大きな影響を与えていたことが知られている。さらに近代以降はアイヌや琉球人・朝鮮人をも含めて日本社会が構成されていることを忘れてはならない。

東アジアの文化的特徴としておもなものをあげれば，漢字と漢語の使用，儒教の浸透，律令の整備，漢訳仏典を通じた

基本考察は，各時代・地域の基本概念を，歴史学の進展に対応する情報や研究動向を含めて叙述しています。

興味あるエピソード，史話，史料などを挿入して生徒の関心を高め，授業をより効果的かつ変化のあるものとするための一助としました。

甲骨文字の発見　清末に至って殷墟から獣骨の断片が多数出土し，はじめ竜骨として薬用に供されていた。1899年劉鶚(鉄雲)が友人王懿栄の病気見舞にこの竜骨を持参し，はからずもそれに文字のあることを発見して蒐集に努め，その一部を記録して『鉄雲蔵亀』という書物を著した。いわゆる甲骨文の収集と研究とはこれからおおいに盛んとなり，孫詒讓・羅振玉など中国の学者をはじめ，日本の林泰輔もこれに参加し，解読に努力した。この結果，これが現存する中国最古の記録で，殷代の占トに用いられたものの遺品であることが明らかとなった。

単なる歴史用語の解説ではなく，ポイントを絞った解説，授業に役立つ内容，最近の研究成果の紹介などを記しています。

なった。しかし亀甲占いは，弥生時代・古墳時代の日本に伝わり，その名残りが対馬や宮中に伝わっている。

邑　中国古代社会における集落の総称。甲骨文字では，「邑」字は土地・区画を示す「口」と，ひざまずく人を示す形の組み合わせからなっており，人間の居住する所，集落をあらわす。邑は本来はたんに集落全般を指していたようだが，防衛の必要などから周囲に防壁をめぐらし，その外側に耕作地を有する集落が一般的となったため，とくに防壁をめぐらした集落を邑と解するに至った。このような邑は各地に散在しており，それぞれの邑内では，人々が血縁関係を紐帯として氏族共同体を形成し，邑の外側に広がる耕作地で農耕を行っていた。邑の規模は大小様々であり，大きな邑は，殷墟で知られる大邑商のように，軍事的圧力と宗教的権威をもって多くの邑を従属させ，一種の連合国家を築いていた。従来は，大邑―族邑―属邑の３層構造をなすと考えられてきたが，近年の考古学の発見などにより，王城である所の大邑(数百ha)―大族邑(数十ha)―小族邑(数ha)―属邑という４層構造が考えられるようになってきている。こうした点に注目して当時の国家を「邑制国家」と呼ぶ。

易姓革命　王朝交替には禅譲と放伐の二つの形式があるが，易姓革命という場合は，とくに放伐(暴虐を働くなどして徳を失った君主を武力によって打倒し，新しい王朝を建てること)を指す。殷の湯王が，暴虐無道であった夏の桀王を武力で追放し，かわって天子の位についたのがその始まりとされる。背景には，天下は有徳者が天命を受けて統治すべきものであり，もし徳が衰え民心が離反すれば，天命はいまの君主を去って別の有徳者に下る，という思想がある。このような思想は戦国時代の孟子によってはじめて理論化され，漢代の董仲舒が天人相関説を唱えるにおよんで完成の域に達したものである。

なお，禅譲は君主が生前に臣下の中でもっとも徳の高い者を後継者として指名し，平和裏に位を譲るというものであり，五帝の一人にあげられる堯が，その子息丹朱をさしおいて舜に位を譲ったのがその最初とされる。王朝交替のもっとも理想的な方法とされ，王莽がこの形をとって即位したのをはじめとして，魏の文帝以降，魏晋南北朝時代にさかんに行われた。しかしこれらの禅譲は，ほぼ全て政治軍事の実権を完全に掌握した有力者に強要されて行ったものであり，禅譲後に前王朝の皇族が殺戮されることも珍しくなかった。宋代以降，禅譲は行われていない。

封　建　周が殷を滅ぼした後，東方を支配するために行ったといわれる支配制度。周王は一族や功臣，地方の有力者に領地とその住民を支配させて諸侯とした(とくに軍事上の要地には一族中の有力者を封じた)。諸侯は公・侯・伯・子・男の五等爵に分けられ，爵位に応じた封土を受け，かわりに貢納・出陣などの義務を負った。これらの諸侯のもとには卿・大夫・士(臣下には大夫と士があり，大夫は上大夫と下大夫，士は上士・中士・下士に分かれる。このうち上大夫は卿ともいったので，一般に卿・大夫・士という)などと呼ばれる直属の臣下がおり，各々官職と土地(これを采邑といい，諸侯の直轄地を公邑という)を世襲した。以上が支配階級を構成するものであり，その下には被支配層である一般農民が，さらにその下に奴婢などの下層民がいたという。以上は『礼記』などに記されているものであるが，これが実際に周代に行われた支配制度であるとは考えられない。周王が諸侯へ分与したと見られる青銅器に鋳込まれた銘文(金文)の検討などからは，殷・周王朝が直接統治するのは限られた範囲のみであって，その外にある諸国に対しては，線的にのばした軍事拠点を確保して軍事的優位を保ちつつ，主として宗教的儀礼をとおして政治的関係を結び，殷王・周王を頂点とする連合を築いていたことが明らかにされている。ただし，金文の中には実際に周王が土地や人民や武器などを与えて支配を命じた封建の実例といえるものもあり，上述の封建は，周王朝のこのようなあり方をもとに，後世儒教的な理想を加えて描かれたものと考えられる。

このような殷・周王朝の体制のもとで，人々は氏族共同体を基本的な単位とし，まとまって生活していたと考えられる。農耕や祭祀・軍事などの活動も，この氏族共同体単位で行われていた。氏族共同体は単独で，あるいはいくつか集まって邑を構成した。『孟子』などは，周代の土地制度として，８家を１単位としてそれぞれに私田100畝を与え，中央に公田を設けて８家それぞれが10畝ずつ，計80畝を共同で耕作するという井田制が行われていたと伝えているが，これは後世の儒家の思想的産物であり，周代の実際とは考えにくい。

なお，近代以降，もともと周代の制度を指す語であった「封建」がフューダリズムの訳語として転用されたが，この場合の「封建」は主として領主階級内部の権力構造を問題としてレーン制の意味で用いられるか，あるいは領主対農民の支配隷属関係を問題として広義の農奴制の意味で(ただしヨーロッパではこの意味でフューダリズムの語を用いない)，またイデオロギーや生活様式などをも含む一つの社会類型を指す言葉として用いられるものであり，氏族共同体を基盤とし宗教的儀礼によって結びついている周代の「封建」の指す意味内容とは本質的に異なる。

卿・大夫・士　東周以後，宗法的秩序を支えとする「封建」制下の周室による世襲諸侯に対する支配力は急速に衰えてい

巻末には，各テーマごとに日本語で読むことのできる参考文献をあげました。

教科書ソフト

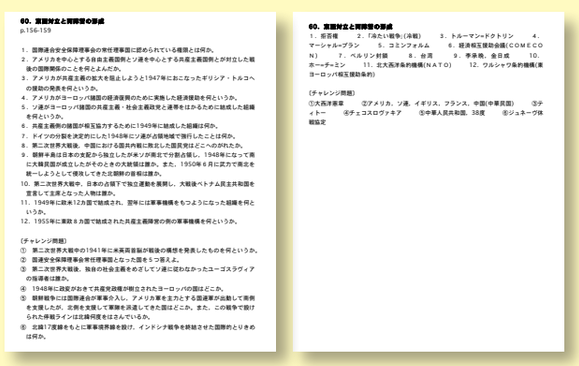
教科書の本文や地図･図版といった教科書に掲載されているデータに加え，『教授資料 授業実践編』より板書例や解説，テストやプリント作成に役立つイラストや白地図，年表，準拠テスト例などの素材をCDに収録しました。さらに，操作方法などを説明した「教科書ソフト活用ガイド」も収録しております。

❶教科書データ Word

教科書の本文，注，写真キャプションといった文字情報のほか，地図や図版も収録しています。

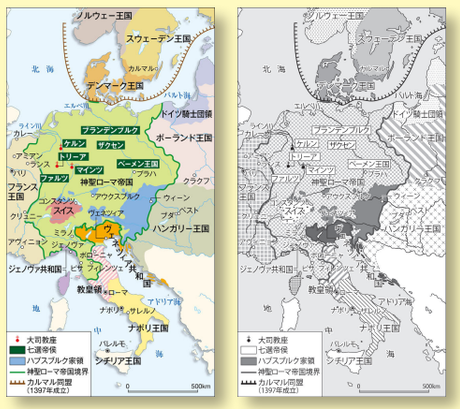
❷準拠テスト例 Word

教科書準拠のテスト例を収録。Word 形式なので授業の進度に合わせて編集可能です。



❸地図・図版 JPEG

教科書に掲載されている地図や図版をすべて収録（写真除く）。地図はカラーだけでなくモノクロでも収録されているので，テストや授業プリントなどに貼りつけてご使用下さい。

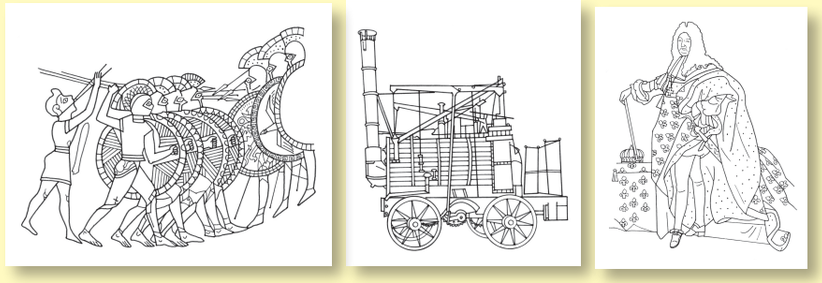


❹白地図 JPEG

各地域別の白地図を収録しています。

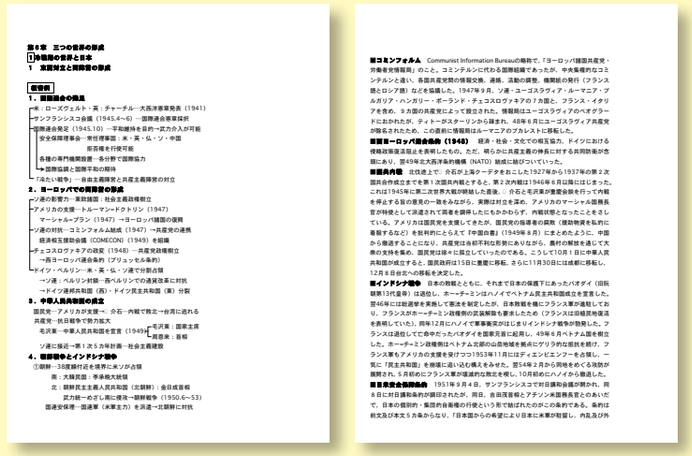
❺イラスト JPEG

プリント作成などの際，ワンポイントで使える人物や建物等のイラストを多数収録。



❻板書例・発問例・用語解説 Word

『教授資料 授業実践編』より，板書例・解説などを収録。



❼史料 Word

『詳説世界史』の史料文など，15 種類を収録しています。

❽年表 Word

先史時代から現代までの年表を収録しています。

❾デジタルブック PDF

教科書のレイアウトをそのまま，デジタルブック（PDF）として収録しました。

❿山川外字フォント

世B310	世B313	世B314
詳説世界史 改訂版	**新世界史** 改訂版	**高校世界史** 改訂版
商品番号：72-034	商品番号：72-038	商品番号：72-037

本体価格：各9,000円(税別)

対応機種　Windows 10/8.1
対応ソフト　Microsoft Word 2013以上
対応ブラウザ　Internet Explorer Ver.11以上

山川のICTでつ なぐ+ふかまる

電子黒板・プロジェクター用

世界史デジタル指導書（世界史A・B共通）

本体38,000円（税別）　商品番号：86-074　※デジタル教材集とデジタル素材集のセット商品です。

山川デジタル指導書の特長

- 電子黒板やプロジェクターなどICT機器を使用した授業で使えるPowerPoint板書例を収録。
- 教科書・教授資料のデータやデジタル素材集などを活用してPowerPoint教材のカスタマイズが可能。
- 特典として，PowerPointの使い方を収録。教科書ソフト（別売り）やデジタル素材集とあわせて使うことでICT対応のオリジナル教材が容易に作成できる。

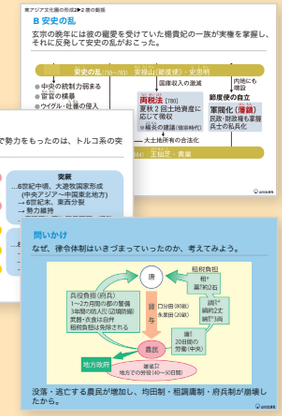
世界史デジタル教材集　※単体でもご購入できます。

本体18,000円（税別）　商品番号：86-076　※指導書扱いにつき，教科書取扱い書店にご注文ください。

デジタル素材活用の，あらゆる授業スタイルに対応！

3つのポイント
❶PowerPoint板書例（97のテーマ、約1100スライド）をご用意
❷短くまとめたエッセンスでポイントが一目瞭然
❸デジタルMAPや教授資料等の教材も充実

内容（世界史A・B共通）
①PDFデータ
・教科書改訂版6点
・教授資料『授業実践編』改訂版6点（詳説世界史〈世B310〉・新世界史〈世B313〉・高校世界史〈世B314〉・要説世界史〈世A318〉・現代の世界史〈世A315〉・世界の歴史〈世A316〉）
・世界史A・B共通教授資料「研究編」
②世界史A授業用PowerPoint教材66テーマ（約900スライド）
世界史B授業用PowerPoint教材97テーマ（約1200スライド）
③デジタルMap（11点）
④黒板投影用デジタル白地図
・特典（PowerPointの使い方）　1ランク上の「PowerPoint資料作成術」／PowerPointで鍛える歴史の「論理思考」



NEW 世界史デジタル素材集　※単体でもご購入できます。

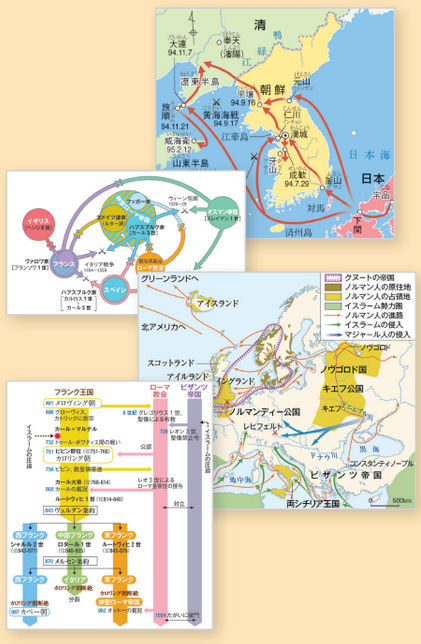
本体20,000円（税別）　商品番号：87-067

探していた素材がすぐ見つかる！すぐ使える！

3つのポイント
❶定評ある教科書と図録から，約2,100点を収録
❷教科書，キーワードなどから簡単に検索できる
❸画質の鮮明さにこだわり，遠くからでもよく見える

- 弊社発行の世界史教科書全6冊に加え，2冊の図録より，写真を除くすべての地図，系図，年表，グラフ，イラスト等の図版や資料を収録。
- 教科書の章立てだけでなく，キーワード検索が可能であり授業準備や授業中でもパソコンの画面上で簡単にセレクト・保存ができる。先生方のイメージする画像を使った授業を強力にサポート。
- パソコン画面上で拡大・縮小も簡単にでき，強調したい部分の投影も可能。
- 教室の後方からでも，十分鮮明な画像が得られる解像度。
- 画像データは，プリント作成にも使用可能。

世界史A・B共通
【教科書】世界史A：要説世界史（世A318）・現代の世界史（世A315）・世界の歴史（世A316）
世界史B：詳説世界史（世B310）・新世界史（世B313）・高校世界史（世B314）
【図録】詳説世界史図録／世界史図録ヒストリカ



パソコンソフト

世界史正誤問題データ集

先生用（Windows版CD-ROM）

本体25,000円（税別）　商品番号：86-070

おなじみの正誤問題集が最新バージョンで登場！

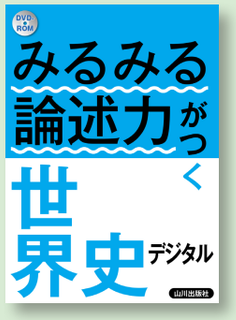
3つのポイント
❶かんたんな操作性を実現
❷利用シーンに応じた，オリジナル教材がつくれる
❸復習用の演習プリントのほか，実践的な入試対策としても使える

2015年までの大学入試に出題された過去7年間分の正誤問題を集めて収録。様々な条件での抽出はもちろん，詳説世界史（世B310）の章・節からの抽出やキーワードでの検索も可能。
※対応機種：Windows 8.1，10

みるみる論述力がつく世界史デジタル

本体20,000円（税別）　商品番号：86-080

論述問題の「解き方」を筋道立ててわかりやすく解説した生徒向けの論述問題集『みるみる論述力がつく世界史』をベースに400題以上の論述問題を収録したデータベース。



教科書『詳説世界史』の章・節からも問題抽出が可能
論述指導に便利な過去問データベース

デジタル地図

山川デジタル歴史地図

本体35,000円（税別）

商品番号：86-079

地歴科ご担当の先生に必携のデジタル歴史地図。世紀ごとの世界地図をメインMAPとし，そこから教科書や図録に収載の地図への切り替えが可能。描画ツールを使って書き込みもでき，白地図にも切り替えられる。

拡大縮小や表示範囲が自由自在！これからの歴史授業に必携のデジタルMap

電子黒板・プロジェクター用

授業用世界史A PowerPoint教材

本体3,600円（税別）　商品番号：86-081

世界史Aの配列に合わせて約70テーマで構成したPowerPoint教材。写真や地図・図版も多数収録。

1スライド=1メッセージで簡潔明瞭。カスタマイズ可能でオリジナルのPowerPoint教材作成にも便利

映像教材（DVD）

授業で使える世界史映像集 全3巻

映像でみる諸地域世界／映像でみる近代・現代（A・B共用）

監修　海上尚美・近江屋篤史・吉岡大輔

分売本体各18,000円（税別）

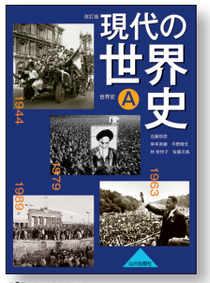
3つのポイント
❶世界史への興味・関心を引き出す映像
❷近代・現代を中心に映像や地図を豊富に収録
❸授業に役立つ解説書付で理解がもっとはかれる

世界史を映像で体感

1巻〈地理導入編〉　74項目（計約111分）商品番号：87-063
2巻〈序章〜3章〉　39項目（計約41分）商品番号：87-064
3巻〈4章〜7章〉　60項目（計約63分）商品番号：87-065

世界史Ⓐ Ⓑ
教科書一覧

Ⓐ



世A 315

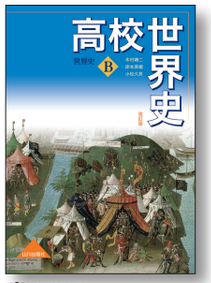
世A 316

世A 318

Ⓑ

世B 310

世B 313



世B 314

著作者・編集協力者

（2020年3月現在，五十音順）

青木 康（あおき・やすし）
立教大学特任教授

イギリス近代政治史
- 詳説世界史
- 高校世界史

今泉 博（いまいずみ・ひろし）
昭和学院秀英高等学校講師

世界史教育
- 詳説世界史
- 高校世界史

岸本 美緒（きしもと・みお）
お茶の水女子大学名誉教授

中国明清史
- 要説世界史
- 現代の世界史
- 詳説世界史
- 新世界史
- 高校世界史

佐藤 次高（さとう・つぎたか）
元東京大学教授／元早稲田大学教授

アラブ・イスラーム史
- 現代の世界史
- 詳説世界史
- 高校世界史

鳥越 泰彦（とりごえ・やすひこ）
元麻布高等学校教諭

世界史教育
- 現代の世界史
- 新世界史

南川 高志（みなみかわ・たかし）
京都大学教授

古代ローマ史
- 新世界史

木村 靖二（きむら・せいじ）
東京大学名誉教授

ドイツ近現代史
- 要説世界史
- 詳説世界史
- 高校世界史

澤野 理（さわの・おさむ）
神奈川県立逗子高等学校教諭

世界史教育
- 要説世界史

中野 隆生（なかの・たかお）
学習院大学教授

フランス近現代史
- 現代の世界史
- 世界の歴史

村上 衛（むらかみ・えい）
京都大学准教授

中国近代史
- 世界の歴史

小豆畑 和之（あずはた・かずゆき）
東京都立西高等学校教諭

世界史教育
- 世界の歴史
- 高校世界史

大津留 厚（おおつる・あつし）
神戸大学名誉教授

東欧近現代史
- 世界の歴史

日下部 公昭（くさかべ・こうしょう）
前筑波大学附属高等学校教諭

世界史教育
- 要説世界史

鈴木 孝（すずき・たかし）
前東京学芸大学附属高等学校教諭

世界史教育
- 要説世界史

橋場 弦（はしば・ゆづる）
東京大学教授

ギリシア古代史
- 詳説世界史
- 高校世界史

森本 一夫（もりもと・かずお）
東京大学教授

イスラーム史
- 世界の歴史

池田 嘉郎（いけだ・よしろう）
東京大学准教授

ロシア近代史
- 世界の歴史

小田中 直樹（おだなか・なおき）
東北大学教授

フランス近代史
- 新世界史

久保 文明（くぼ・ふみあき）
東京大学教授

アメリカ政治史
- 新世界史

高山 博（たかやま・ひろし）
東京大学教授

ヨーロッパ中世史
- 世界の歴史

羽田 正（はねだ・まさし）
東京大学特任教授

イスラーム史
- 世界の歴史
- 新世界史

油井 大三郎（ゆい・だいざぶろう）
一橋大学名誉教授／東京大学名誉教授

アメリカ現代史
- 詳説世界史
- 高校世界史

石井 栄二（いしい・えいじ）
東京都立国立高等学校教諭

世界史教育
- 詳説世界史
- 高校世界史

勝田 俊輔（かつた・しゅんすけ）
東京大学教授

アイルランド近代史
- 新世界史

小松 久男（こまつ・ひさお）
東京大学名誉教授

中央アジア近現代史
- 要説世界史
- 詳説世界史
- 高校世界史

千葉 敏之（ちば・としゆき）
東京外国語大学教授

ドイツ中世史
- 新世界史

林 佳世子（はやし・かよこ）
東京外国語大学教授

オスマン帝国史
- 現代の世界史

石橋 崇雄（いしばし・たかお）
東洋文庫研究員

中国清代史
- 世界の歴史

仮屋園 巖（かりやその・いわお）
東京都立国立高等学校教諭

世界史教育
- 要説世界史

近藤 和彦（こんどう・かずひこ）
東京大学名誉教授

イギリス近世・近代史
- 現代の世界史
- 世界の歴史

津野田 興一（つのだ・こういち）
東京都立日比谷高等学校教諭

世界史教育
- 要説世界史

水島 司（みずしま・つかさ）
東京大学名誉教授

南アジア史
- 詳説世界史
- 高校世界史